

令和6年度「校内サポートルーム(KSR)研究指定校事業」 成果報告書

1 指定校・指定校群 (高松市立山田中学校)

2 実施の内容

(1) KSR運営体制

- ・ 本校では、教室配置については、生徒玄関とは別の出入口があり、トイレや保健室にも近い部屋を準備した。
- ・ 相談室（校内サポートルーム（以下KSR））に専属の担当（以下KSR担当）を配置し、KSRの運営と不登校傾向の生徒の支援を行った。KSR担当が中心となって各学年団の教育相談担当や通室生徒の学級担任が情報交換を行いながら支援を行った。日々のKSR運営は、学年・教科等を可能な限り配慮し、朝の会から帰りの会までの間、多くの教員が担当できるようにした。

(2) SC・SSWとの連携

- ・ KSRの通室は、SCまたはSSWと本人・保護者が面談し、仮通室を経て正式に通室とし、通室した際は可能な限りSCと面談を設定し、生徒の心理状態や生活習慣等の把握に努めるとともに、面談を通じて得られた情報から支援の方向性を決定していった。

3 成果

(1) 校内サポートルームにおける児童生徒の様子

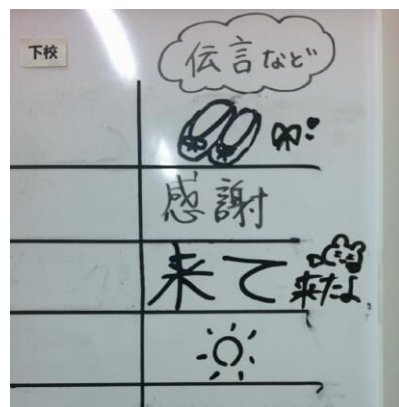
12月末時点でのKSR通室生徒は、11名であり、内3名について紹介する。

生徒	KSR利用状況	教師の関わり	生徒の変容
A	本人の健康状態から日によって登校時間が異なっていたが、1日開設されていたので、体調に合わせ、ほぼ毎日登校できた。	短時間登校が多かったため、SCと相談し、KSR外での活動を広げるため、図書室へ本を借りに行ったり、図書館指導員と話したりできるよう場を設定した。	図書室利用を通じ、KSRの外へ行くことへの不安が軽減し、ICTを活用した学習に意欲を示したり、次年度への期待を自ら話したりするようになった。
B	1学期はテストに向け、積極的に学習に取り組んでいたが体調の変化により、2学期は欠席が増えた。12月より短時間利用が増えつつある。	登校時には担任が面談したり、手紙を渡したりし、本人との関わりを増やしていくとともに、SC・SSWとの相談時間を定期的に設定した	自習の中で教科担任への質問もKSR担当者を通じて行うなど学習意欲が高かったが、体調の変化に伴い、登校が難しくなった。現在はSSWとの面談を目標に登校している。
C	2学期中頃から教室の登校が難しくなり、12月より仮通級を始めた。定時に登校し、自習に取り組んでいる。	担任が規則正しい生活を送る習慣づくりを提案し、その一つとして通室が始まった。担任が事前に行事予定や下校時間等を伝え、安心して登校できる環境を整えた。	欠席時は昼夜逆転の生活をしていていたが、担任の説得により、通級し始めてから、定時に登校できるようになり、現在進路について真剣に考え、自習を頑張っている

(2) 校内サポートルームにおける活動及び支援の工夫

ア ホワイトボードによる出欠確認

在籍者の出欠予定を記入することで、K S Rをその時間担当する教員が情報共有できるように室内のホワイトボードを用意した。また、登校した生徒が自分で給食の有無や下校予定時刻を書くようにし、生徒自身がスケジュール管理をできるようにした。右の写真は同じクラスの生徒がコメントを残し、通室生徒が返事を出したものである。通室生徒の中には、クラスメイトが残すコメントを楽しみにして登校する生徒もあり、想定外の効果があった。



イ 行事予定

急な日程変更を苦手としていたり、登下校時の視線を敏感に管理したりする生徒もいるため、1週間前に下校時間等を含めた行事予定や担当教員一覧表を示すようにした。特に、テストについてはどのような方法で受けたいかも担当が事前に確認するようにした。

ウ 学習機会の補償

学習機会の補償については、生徒の希望があれば、学習進度に合わせ、タブレット端末を活用するようにし、クラスによってはT e a m sを使い、授業後の板書を見られるようにした。また、教科への質問があった際はK S R担当を通じ、相談室で指導を受けた。しかし、ほとんどのK S R通室生徒が自習と読書を希望するため、図書館司書の協力を得て学級文庫を設置したり、I C Tを活用した学習方法について一緒に確認したりして、教室復帰の土台作りをして学習の時間の充実を図った。

エ 進路相談

通室を始める際に、保護者の心配の一つが進路であるため、進路コーナーを設け、オープンスクールや受検日等をどの学年も見られるようにした。また、高松市教育委員会が行っているオンラインの高校説明会には、K S R担当がすべての学年の担任に声をかけ、該当生徒やその保護者に参加を促したところ、1・2年生の保護者からも大変好評であった。

(3) 総括

K S Rを設置し、朝の会から帰りの会まで常に教員を配置できるよう時間割を工夫したことで、不登校傾向の生徒や保護者に安心して登校できる場所と受け止められている。また、S Cと生徒との定期的な面談が貴重な情報収集の場ともなり、支援計画を見直すきっかけともなった。今年度、完全に教室復帰を果たした生徒は1名であったが、次年度に向け、自分の生活習慣を見直す生徒や新年度への期待や具体的な進路について話ができるようになった生徒がいたことは成果といえる。

課題としては、教員数の減に伴い、常時開設が非常に厳しいことが挙げられる。人員配置の関係上、K S R担当教員が1日中在室することはできず、様々な専門科目教員が担当するメリットもあるが、人間関係をうまく構築できない生徒にとっては、初対面ではやはり緊張を強いられる状況である。

2つ目は学習機会の補償である。K S Rへの通室をゴールとする生徒や保護者もあり、個別の支援計画を策定し、その生徒の指導や目標について共通理解を図るとともに、短期目標や長期目標を生徒自身に設定させ、見通しをもたせたい。

ピア・サポート活動等、学校教育全体を通して仲間づくりに取り組んでいることもあり、不登校傾向のある生徒は令和5年度8.2%（44名）に対し、令和6年度6.8%（37名）であり、減少傾向にある。教職員だけでなく、保護者、S C・S S W、外部の専門機関等と連携し、個別の対応を丁寧に行ってきたことも要因と考えられるため、集団や個に対し、継続的な支援を今後も行っていきたい。